

小鹿野歌舞伎

町じゅうが役者「歌舞伎のまち・おがの」

小鹿野町教育委員会 社会教育課主幹 山本正実

小鹿野町は埼玉県の西部、秩父市の西に位置し、名峰二子山や両神山などを水源とする赤平川に沿って広がる静かな山間の町であるが、町じゅうが役者といわれるほど歌舞伎が盛んな町である。面積は一〇〇平方km、人口約一万二千人、江戸時代から絹の町として栄え、西秩父の中心地として発展してきた。美しい自然にも恵まれる環境の中、「歌舞伎のまち」という横顔を生かし、伝統文化を基調としたまちおこしが展開している。

小鹿野歌舞伎小史

江戸時代に江戸・京都・大坂といった大都市で発展した歌舞伎は、娯楽として日本じゅうの村々に広まっていった。それぞれの土地で

は、見るだけでなく素人が自分たちで演じて楽しむ地芝居（農村歌舞伎）が誕生した。その数は数千ともいわれ、小鹿野周辺でも江戸時代後半から、生糸生産の好況などを背景とした豊かな経済基盤が祭りや歌舞伎熱を支え、まさに「町じゅうが歌舞伎役者」といわれるほどだった。

秩父地方での歌舞伎上演の歴史は古く、秩父神社大祭（秩父夜祭り）に行われる絹市にあわせ、江戸時代中期から屋台芝居が行われていた。小鹿野町下小鹿野奈倉妙見宮に残る屋台部品に記された、寛政四年（一七九二）の師匠坂東三十郎による「小栗判官」が秩父地方での地芝居上演の最も古いものとされる。その後、文化・文政期（一八〇四〜三〇）に井上（秩

父市下吉田）出身の坂東彦五郎が江戸で修行を積み、帰郷して若い衆に芝居を教えたことを発端に一気に歌舞伎が広まった。明治時代に結成され西秩父（吉田・小鹿野・両神地域）方面を中心に活躍した「大和座」と野上（長瀬町）・秩父市方面で活躍した「和泉座」の両座が秩父地方の歌舞伎の最盛期を作り上げた。

しかし、昭和に入ると映画の流行により一座の経営もままならなくなり「高砂座」、「秩父座」、「梅松座」と変遷した。戦後「秩父歌舞伎正和会」が結成され、「新大和座」も誕生したが、昭和三十年代から四十年代にかけて、わが国の高度経済成長や社会構造の変化、テレビの普及などにより、さすがの歌舞伎熱も冷え込んだ時代を迎

えた。祭り芝居を見る人も少なく、道具類も痛みが激しくなり、このままでは小鹿野歌舞伎も消滅するのではないかとという危機感が高まった。昭和四十六年、町の体育館に歌舞伎をはじめ町内の郷土芸能を一堂に集めた「郷土芸能祭」が始まり、これをきっかけに伝統文化を見直そうという動きが生じ、昭和四十八年に小鹿野歌舞伎保存会が結成され、昭和五十年には県指定文化財の指定を受けるなど、徐々に高い評価を受けるようになった。多くの後継者を育てながら伝統を受け継ぎ、小鹿野歌舞伎の活躍は今また地芝居の全盛期を作っているともいわれるようになった。

十六様の歌舞伎

小鹿野町では、次に紹介するよう町内五地域の祭礼など年に六回は必ず歌舞伎が演じられている。

一年で最初の歌舞伎奉納は、三月五日、般若の日本武神社の祭りに地元の十六若連が奉納する十六歌舞伎である。神楽殿と呼ばれる常設の舞台が境内にあり、神楽の奉納は喜んで昼と夜に歌舞伎が演じられる。舞台の下は楽屋になっており、神楽や歌舞伎の衣裳・かつらが所狭しと置かれ、化粧や

着付けに忙しい役者が並ぶ。この名物は囲炉裏で焼く目刺し。これを肴に御神酒をいただき、次の幕の話題に花が咲く風景は時代を経ても変わらないものがある。三月とはいえ夜の芝居見物は真冬同然、時には雪の舞う中で若者の熱演に声援を送る姿がある。

近年は近くの長若中学校の生徒

たちが総合的な学習の時間に習った歌舞伎を祭りに上演するようになり、頼もしい後継ぎが育ちつつある。全国の地芝居団体の悩みとして後継者確保、裏方の不足、資金難などの苦労話を聞く。それに比べ小鹿野歌舞伎は、義太夫・衣裳・かつら・大道具・楽器などすべて自前で町の人々が受け持ち、

指導者も複数活躍しているという恵まれた環境がある。

小鹿野春祭り屋台芝居

春四月、第三土曜日とその前日に祭礼期が変わった小鹿野春祭り。極彩色の彫刻・飾り金具など豪華な装飾で飾られた四基の屋

台・笠鉦が古い街並みを曳行される。祭り屋台二基は歌舞伎上演設備を持つことが特徴である。

祭り初日の金曜日夕刻、二基の屋台は町内の曳行を終えると街道の真ん中に止まり、争うように両側に張出し舞台を街道の幅いっばいに組立て、床面積を四倍近くにする。勾欄を広げ、小型の屋台ともいうべき両芸座を置き、大人の役者が演じても十分な広さと豪華さを誇る。さらに両側の商家一階は楽屋、二階が棧敷席となる。交通止めとなった街道に敷物が準備され、見物席ができる。古くから屋台芝居といわれ、祭りの日だけ短時間に町そのものを芝居小屋に変身させる演出は全国の祭りにみられない大きな特徴である。地元では「日本一豪華な歌舞伎舞台」と自慢している。祭り屋台・曳山・山車の上で歌舞伎を上演する地域は全国に数多く、滋賀県長浜市、石川県小松市、福島県田島町などの曳山が有名だが、曳山のみで舞台を拡大せず主に子供歌舞伎の舞台として使われている。

ほんぼりや提灯に照らされた幻想的な屋台芝居も桜の咲き誇った時期に重なる。「春宵一刻値千金(しゅんしやういつくあたいせんきん)」



日本一豪華な歌舞伎舞台といわれる小鹿野の屋台芝居(上町屋台芝居)

という漢詩の一節が思い浮かぶ。後に「絶景かな絶景かな、春の眺めは値千金とは、小(ちい)せえ、小せえ」と芝居のセリフになった名文句である。趣向をこらした風流(ふりゆう)を展開する小鹿野の春を一言で言い表している。どこことなく心地よい花冷えの陽気ときらびやかな檜舞台に町の子ども、若者、千両役者たちが演じる姿は、先人たちが作り上げた桃源郷ともいえ、祭り一色の町で繰り上げられる地芝居は人々の誇りとする風景である。

お天狗様の歌舞伎

春祭りに続いて五月三日には下小鹿野津谷木という集落にある木魂神社(お天狗様)の歌舞伎がある。三月から五月にかけて三か所で六つの歌舞伎団体の上演があり、この時期は毎晩のように町内各所で芝居の稽古が行われている。各地域にベテランの指導者がいるため同時並行での稽古が可能である。集落から歩いて十分ほどの小さい山の頂上に神社があり、その神様への奉納と参拝者への余興として古くから歌舞伎が演じられている。全国でも山の頂上に歌舞伎舞台があるのは他には無いといえ、

地元の人々の歌舞伎に対する熱意を感じさせる。新緑の木々に囲まれた神社と舞台の間の斜面が見物席で、江戸時代そのままの芝居上演風景がある。神社氏子の若連有志による役者も層が厚く、親子三代役者の家という例も珍しくない。

奈倉女歌舞伎

十月第一土曜日に奈倉妙見宮で行われる女歌舞伎も人気がある。地元住む師匠のすすめで昭和五十八年、全国でも珍しい女性だけの歌舞伎一座が誕生した。妙見様は女性の神様だから女歌舞伎を奉納すれば神様が喜ぶだろうという理由もある。神社境内にこの日一日だけ掛け舞台ができて、花道、定式幕もある舞台ができあがる。夕刻から耕地(集落)全員参加による子どもからお年寄りまでの民謡、カラオケ、寸劇などが披露されトリとして女歌舞伎が奉納される。見物席は重箱と御神酒持参の家族、親戚知人が集まり役者に声援が飛ぶなど賑やかな雰囲気が続り広げられる。時代物・世話物といった歌舞伎のレパートリーも広く、何度も東京公演に招待された堂々とした芝居が大人気である。誕生二十年を経た女歌舞伎の後継者とし



お天狗様の歌舞伎 木魂神社の祭。山の上に作られた舞台で、昔ながらの芝居風景

て孫の世代の女子小中学生による歌舞伎も始まっている。

歌舞伎・郷土芸能祭

十一月第三土・日曜日に「歌舞

伎・郷土芸能祭」が小鹿野文化センター・ホール(七百席)で開催される。昭和四十六年十一月、衰退し消滅の恐れがあった小鹿野歌舞伎を盛り上げようと町主催の芸能発表大会が企画され、多くの支

持を得られた。これまで三十五回を数え、今では町最大の歌舞伎イベントとして広く知られるようになった。これには次のような背景がある。

小鹿野町では昭和五十年代後半から芸術文化の村づくり事業が始まり、都会から移り住んだ芸術家や町内の芸術・文化に携わる人々の集積を図り、市街地の古い街並みを生かそうという動きがあった。平成三年から開催された文化イベ



「歌舞伎横丁」地域の特産品や味のサービスも

町外に出るばかりでなく、平成八・九年の「関東歌舞伎・郷土芸能祭」「全国歌舞伎・郷土芸能祭」を開催し、全国から代表的な歌舞伎が小鹿野に集まり、多くの観客で賑わった。会場では特産物の

ント「小鹿野画衆国展」なども広く紹介され、文化の町というイメージが向上した。同時に伝統ある華やかな祭り行事が、歴史と伝統を生かした町の顔づくりに欠かせないものとして注目を受けるようになった。なかでも小鹿野歌舞伎は特色ある文化であり、これを地域づくりの中核に据え、町全体で育成し、かけがえのない町の財産として保存・活用することにも、地域に根ざした文化を創造しようと「歌舞伎のまちづくり事業」が平成五年頃から始まった。

それ以前にも歌舞伎を町の文化使節として派遣し、全国に紹介する「地域間文化交流事業」が平成二年度から始まった。北海道から関西まで全国五十か所で公演し、町のイメージアップが図られた。

販売も行われ、来場者へのサービスと歌舞伎のまちづくりのアピールが町をあげて行われた。この形が定着し、毎年十一月の「歌舞伎・郷土芸能祭」は観光物産展「歌舞伎横丁」とともに多くの来場者を集めるようになった。

現在では歌舞伎ワークショップといえる歌舞伎入門教室・伝承教室や中学校の総合的な学習、町民サークルや子ども歌舞伎の発表の機会ともなり、地芝居のデパートともいわれるこの町の歌舞伎伝承活動の大きな広がりを見せている。

鉄砲祭りの歌舞伎

十二月第二日曜と前日に行われる「鉄砲祭り」で著名な八幡神社の祭りに曳行される屋台でも祭り前夜と当日の昼と夜、三度にわたる地元の上飯田の人々により屋台芝居が行われる。小鹿野町の歌舞伎上演の一年を締めくくる舞台は、三番叟の上演により祭りや歌舞伎の安全を祈って始まる。八幡神社の氏子たちによる歌舞伎も古い伝統を誇り、上飯田という約五十軒の集落の若者が受け継いでいる。八幡神社が古く平家方の武士によってこの地に勧請されたという言い伝えから、この祭りだけ源氏が

活躍する「義経千本桜」や「谷嫩軍記」などの歌舞伎を演じてはならないという決まりがある。深々と冷え込む冬空に屋台の前でたき火をしながら見物するという昔ながらの風景は、地芝居ならではの、人気がある。

この他町内のイベントや中学校の文化祭、老人福祉施設での公演、県内外から依頼され出張公演など多い年で歌舞伎上演回数は約二十回を数える。これまで見てきたように、小鹿野町では町主催の郷土芸能祭を除き、五つの地域で伝統的な形で歌舞伎が上演されてきた。これらは各地域の神社の祭礼に氏子を中心となって奉納するもので伝承のベースとなるものである。各地域では歌舞伎が社会生活の一部といえる形で親子代々受け継がれてきた。また町内には神楽、獅子舞、八木節、秩父囃子など伝統芸能団体が三十近くあり、子ども頃から慣れ親しんでいるため、歌舞伎という古典芸能を受け継ぐことにさほど抵抗がないといえる。これらの要素が下支えとなっており、町全体で小鹿野歌舞伎を盛り上げている。

小鹿野町ホームページ

<http://www.town.oganosaitama.jp/>